

## 「解深密經 勝義諦相品」について

### — 第四章における勝義の特質 —

研究生 浅野 秀夫

『解深密經』『勝義諦相品』（以下『勝義諦相品』という。）は、先行する般若經の所説に基づき、勝義の特質を述べる。この内、第四章では、勝義は一切において一味という特質であると説かれる。ここでは、般若經から『勝義諦相品』への思想展開において、どのようにして勝義が一味という特質と結び付いたのかを考察する。

『勝義諦相品』では、勝義とは、色蘊等五蘊における清浄な認識対象を指すが、その対象は固有の特質を保持せず均質化されている。この一様かつ平等な状態を一味と称し、勝義の特質として定義付ける。また、真如と法無我が勝義の同義語であり、瞑想中に五蘊の中の何れか一蘊についてこれを体験すれば、真如に適う仏の智慧によって、残りの四蘊に関しても勝義延いては一味という特質を理解できると説かれる。つまり、個々の法を理解するだけでなく、何れかの法を介して察知した勝義が、一切法にまで適用し得る同質性を備えていることに留意すべきであると主張する。勝義が一味という特質であることの淵源は、般若經に見出される。『八千頌般若經』によれば、般若波羅蜜を實踐し勝義へ向かう菩薩にとって、法とは本来、色蘊等五蘊へと区分されることはない。この何等差別のない状態が空であり、空性であって、一切法に共通する普遍的な本質を表

すと共に、一味という特質と重ね合わせる事ができる。また、勝義と空性は同意であり、勝義が一味という特質であることの原意が確認される。

ところで、『八千頌般若經』では、空性が言葉では表現できない、それが法の本質であり、それ故、法は言葉では表現できないと述べられる。勝義についても、同義語である空性を介して言葉では語り得ないこととして捉えられる。そして、法は言葉では表現できないという思想は、『瑜伽師地論』『菩薩地』（以下『菩薩地』という。）へと継承される。

『菩薩地』によれば、菩薩は、法無我に関する智慧により、一切法が言葉を離れていることをありのままに知ることとで、言葉に依存した法の分節化を免れる。そこでは、事象にすぎない、真如にすぎないと体験するのであるが、この体験さえも自覚することはない。言葉では語り得ない対象（真如＝勝義）に向かつて瞑想することで、一切法が平等であると察知するのであり、これをもたらず智慧が法無我に関する智慧、無分別智なのである。これは、一切法が一味という特質を備えていることを無二の智慧によって把握すると述べる『勝義諦相品』と同意であるといえる。

このように、般若經の説く一切法は空であり、本来言葉による差別はないとする思想が一味という特質の土台となり、ここに言葉では語り得ない法の本质である勝義を無分別智によって察知するという瑜伽行派自身の考えが『菩薩地』を介して導入されたと考えられる。